論　　文

北部タイにおける村落社会の解体と再編成過程

——部族から国家への道程——*

岩　田　慶　治

1　問題の所在

東南アジア大陸部，すなわちインドシナ半島における民族史の展開が，若干の例外をのぞいて，北から南にむかう民族移動の潮流によって裏打ちされているということは疑ない事実である。じっさい，幾重もの民族移動の波が，北方のアジア大陸内陸部からこの半島に波及したということ，東南アジアが諸民族の通路であり，ときとして袋小路でもあったということは確かなことである。そこでこの事実，東南アジアの民族史的鳥瞰図からいくつかの問題が浮かびあがってくる[1]。例えば，(1) 諸民族の南下移動は温帯から熱帯にいたる気候帯の配列によって誘引されたもの，つまりは豊饒な熱帯的自然の生産力が北方民族を吸引し，魅惑したのであろうか。あるいは (2) インドから南シナに至る東西移動路こそ民族移動の本道であって，東南アジアにおける民族の南下現象は単にそこからの支流，枝わかれにしかすぎないのであろうか。その際，東部ヒマラヤから雲貴高原，南シナを経て西南日本にいたるいわゆる温帯照葉樹林地帯が今日の東南アジア的民族生活様式の故郷であり，そこに稲作民族文化の少くとも1つの原型を求めることが出来るのであろうか。(3) そうすると，これら諸民族の南下移動は直接には漢民族，中国文明の圧迫と，それからの逃避として十分に解釈しうるものであろうか[2]。つまり，熱帯の吸引力ではなくて，北方民族の圧力がかれらを南方へおしやったのかということである。(4) しかし，東南アジアにおける南下移動は同時に山地から平野への移動，河谷平野から沖積平野への展開に対応する。ここでは移動は民族の平野進出，広域占拠を物語るわけである。

---

* 本稿の一部については アジア地域総合研究第2回合同研究会 (1963.1.27) において発表した。その際の発表要旨は同上連絡季報 7.8 (1963.3.15) に掲載した。

1) Eickstedt, E.F. ; Rassendynamik von Ostasien, 1944 が東アジア諸民族の動態を展望しており，このうちに今後とも検討すべき多くの問題を含んでいる。

2) Wiens, H.J. ; China's March toward the Tropics, 1954 がこの問題を正面から取扱っている。

たしかに，民族移動の原因，移動を促す諸条件についてはなお未解決な多くの問題がのこされている。しかし，それとともに重要なことは民族の社会・文化的変化，ないし経済的変動と移動史との関係である。(5) 一体，かれらはその南下移動にともなってかれらの経済・社会・文化における発展をかちとることが出来たのであろうか。かれらにとって民族移動史はそのまま民族の進化過程であり得たのであろうか。当然のことながら移動がそのまま民族の没落にむすびついていた場合もあったに違いない[3]。(6) また，一口に進化，発展といったところで，経済・社会・文化のそれぞれが足並そろえて発達するとばかりは限らないであろう。ちぐはぐな，跛行的な変化がみられる場合もあるであろう。もちろん，民族的差異を見逃すことも出来ないであろう。(7) 問題をタイ族に限ってみても，かれらの南下移動史のうちに部族から国家への過程，部族文化から国民文化への移行を読みとることが出来るであろうか。つまり，かれらにおける国家形成を自律的な民族社会発展の到達点として理解してよいのであろうか。それとも，その間に他律的な要因、外部勢力の介在を想定しなければならないのであろうか。(8) 文化的にみて，東南アジアはインド文化とシナ文化の谷間に位置し，双方から持続的な，深刻な影響をうけている。しかし，これら外来の影響を吸収，消化して，特異な，個性的な東南アジア文化がすでに形成されていると考えられるであろうか。たとえ，インド文化，シナ文化に比肩しえないまでも，ユニークなひとつの文化，稲作民族文化とでも呼ぶべきものの存在をどのように考え，位置づけたらよいであろうか[4]。(9) 東南アジアにおける都市，ことに政治的な首都の発達には目ざましいものがある。しかし，一歩その外へ出てみると農村は依然として貧しく，停滞的であるように思われる。村落生活はふかく自然のなかにとけ込んでおり，両者の対抗関係はみられない。生活に矛盾がなく，進歩への契機に乏しい。一体，どうしたらこの状態を脱却して新たな進歩への転機をつかむことが出来るのだろうか。そのための出発点をどこに求めたらよいのだろうか[5]。(10) 従来のいわゆる後進国開発理論は東南アジアの社会と文化にたいして多少とも理解の欠ける点があった。二重社会 dual society といい，複合社会 plural society といっても，その主要な関心事は植民地化とともに形成された特異な社会体制の分析にあるわけで，原住民社会ないし伝統的な村落社会そのものに関してどれほど純粋な関心があっただろうか。あくまでもかれら自身の社会と文化とを凝視し，そのうちに過去から未来にわたる創造の可能性を探究することが必要である。まして今日のように西欧植民勢力の撤退した

3) 岩田；東南アジアにおける山地民族の問題——民族の運命——(印刷中，1964) において山地民族と平野民族とにおける社会・文化的統合様式の相違をのべ，前者のそれが袋小路に入りつつあることを示した。

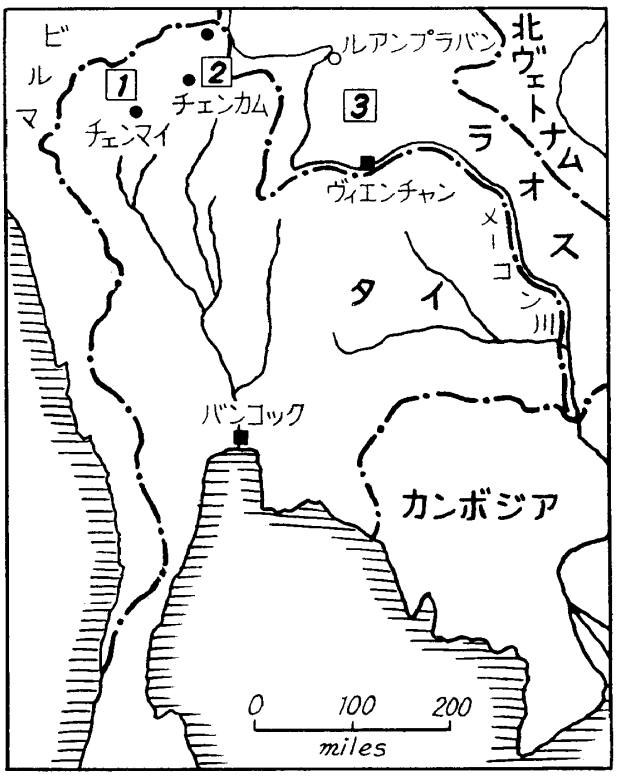
4) Bacon, E.; A Preliminary Attempt to Determine the Culture Areas of Asia. Southwestern Journal of Anthropology, 1946. 2 : 117-132.

5) タイをマイ・ペン・ライ（ラオスではボー・ペン・ニャン）の国というひとがあるが，お人好し，あきらめ，放棄の心情の背後につよく自然依存ないし自然よりかかり型の文化を見ることができるであろうか。そこでは人間社会は自然の一部分である。しかもその部分を区切る境界はなく，社会は徐々に自然のなかに fade in している。<よいこと> di：はすこしづつ<よくないこと> mai di：に移行するのであって<善>と<悪>がそこで斗争しているのではない。

あとには，一体どのような体制が，新たな社会と文化が誕生しなければならないのか，このことを考えるうえにもかれらの伝統社会は再検討されなければならないであろう。(11) 日本が東南アジアに関心をもち，東南アジアの人々が日本に期待をよせるのは単なる経済戦略なのであろうか。あるいは，近隣の後進諸国にたいするヒューマニズムの発露なのであろうか。あるいは両者の結びつきにはもっと根ぶかい，思想的根拠ないしは運命的なものがあるのだろうか。ということは日本を含めて東アジアの自然と生活のうちに，なお開発せらるべき未知の可能性が秘められているのであろうか。未開発ではあるが，未来の人類文化に貢献しうる文化類型がここに眠っているのであろうか[6]。

もちろん，小論が以上のごとき設問のすべてに答えるものでないことはいうまでもない。地域的にも民族的にもきわめて限定されたものにすぎない。すなわち北部タイにおける部族的な伝統社会がどのように変質，解体してゆくか，それが今度はタイ国民社会の部分としていかに再編成，再組織されてゆくかという社会変化過程の1駒に視点をあわせたものにすぎない。しかし，筆者の意図はこの1駒をあくまでも上記の全体的展望のなかに位置づけて考えてみようという点にある。

なお，本稿の主要な資料は筆者の参加した稲作民族文化綜合調査団（1957～58），および大阪市立大学・京都大学合同第2次東南アジア調査隊（1961～62）によってもたらされたものである。この機会に関係各位にたいしてあつく感謝する次第である。



第1図　調査地域図
1. メーコン村（タイ・ヤーイ族）
2. ノーン・ルー村（タイ・ルー族）
3. パ・タン村（タイ・ヌーア族）

2　住民の呼称とその配置

2・1　ある住民ある種の人口集団にたいする＜呼び名＞は分類基準の如何によって幾通りにも変化しうる。生物分類における種，属，科などの＜呼び名＞と一脈相通ずるものがあるけれども，必ずしもこのような分類上の概念とは限らない。さまざまな＜呼び名＞がそれぞれの社会

6)　この点に関する筆者の一応の考方は 岩田；東南アジアと日本，大阪大学文学部インド・東南アジア研究センター彙報 (1)，1964 にのべた。また，その一部について，岩田；タイ族における人生とその背景，石田英一郎教授還暦記念論文集 所収 1964年。

的な場に組みこまれ，動的な力関係の場を構成しているのである[7]。筆者はかって北部ラオスのパ・タン村 Ban Pha Tang 滞在中に，このことをまざまざと思い知った。パ・タン村の村人はその大部分がタイ・ヌーア Thai Neua 族にぞくするのだが，かれら自身このことを外来者である筆者には決して告げようとしなかった。「あなた方は何族ですか」と尋ねれば「われわれはラオ人 Thai Lao です」と答えるにきまっていた。「ラオ人はわかっているが，ラオ人のなかの何族なのか」と聞き直しても，かれらはあくまでもラオ人といい張るだけである。そしてラオ人が住民の立場により多様に分類されていることを知るには可なりの時間を要する。タイ Thai（ヒト），プー Phou（ヒト），コンKon（ヒト）が微妙に使いわけされていることを知るには更に時間がかかる。ここで，当時の経験をあらためて整理しょうとは思わない。要は住民が住民を区別する区分原理，区分体系 discrimination system[8] の重要性を指摘すれば足りる。

さて，パ・タン村を中心とする北部ラオスではタイ・ヌーア族 Thai Neua, タイ・プーアン族 Thai Pouan などのタイ諸族が住民の中核をなし，そのなかに少数ながら他のタイ諸族，例えばタイ・エ族 Thai Et, タイ・ソウン族 Thai Soun, タイ・ダイ族 Thai Dai, タイ・ポウン族 Thai Poun などが混入し，さらに赤タイ族 Thai Deng, 黒タイ族 Thai Dam などが入りこんでいる[9]。すでに部族段階を脱して一種の地域集団——タイ・ヌーアは北方タイ族の意でサム・ヌーア Sam Neua を故郷とする。タイ・プーアンはプーアン地方すなわちシェンクワン Xieng Khouang 高原のタイ族の意である——としての色彩をもつタイ族のなかに，なお部族的色彩を濃厚にとどめているプー・タイ族 Phou Thai（黒タイ，赤タイなど）が混住しているということ，そしてこの体制をもってヴィエンチャン平野のラオ族——これを北部住民はタイ・ラオ Thai Lao と称する——に接しているということ，図式的にいえば一番北に部族的タイ Tribal Thai が分布し，その南に地方的タイ Local Thai がおり，さらにその南に国民的タイ National Thai が分布するということである。ただし，ここでは一応ヴィエンチャン周辺の諸種族混成のタイ族を指して国民的タイと呼んだけれども，ラオスにおける国民意識がどの程度まで成熟しているか疑問の点がないわけではない[10]。

次に北部タイについてみるとこの問題はどのようにとらえられるであろうか。北部タイの古都チェンマイ Chiengmai, ランプーン Lamphun, ランパン Lampang, チェンライ Chiengrai

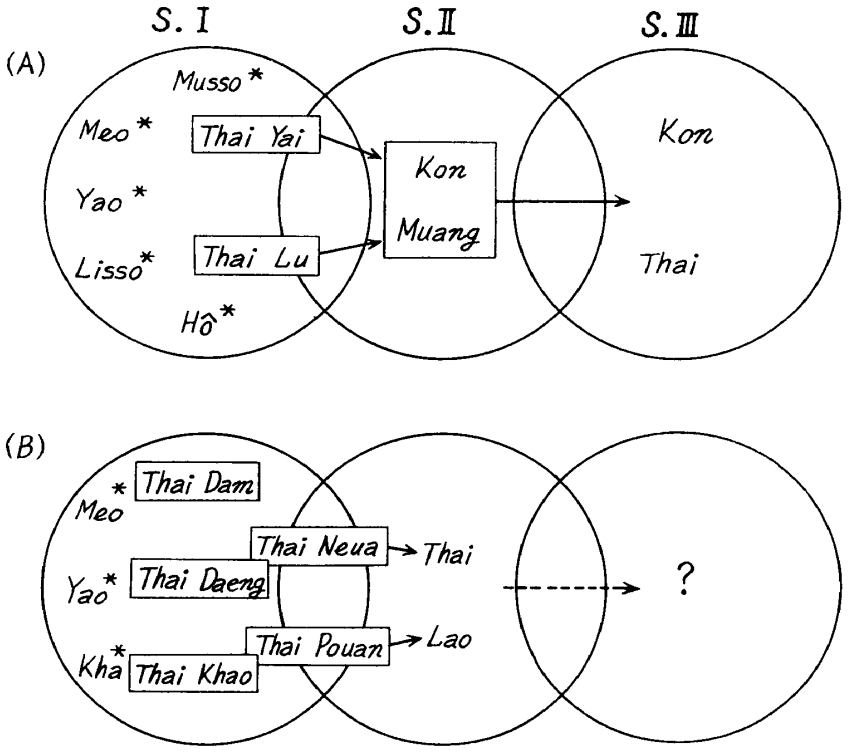
7) 岩田；パ・タン村——北部ラオスにおける村落社会の構造——第1次稲作民族文化総合調査団報告，1964。

8) discrimination system という用語を筆者は James West; Plainville, U.S.A. 1945 より借用した。この概念はなお十分に検討，利用の価値あるものであろう。

9) 岩田；Nam Song, Nam Lik 流域における諸種族の分布と移動，民族学研究 Vol. 23, No. 1, 2

10) ラオスにおいては古来ムアン Muang が住民の政治的社会的な生活基盤であり，ムアンの連合体としての国家が認められるにすぎない。単一国家であれ，多頭 polycephalous 国家であれ，それらはいはば表層現象にすぎなかった。Sasorith, Katay, D.; "Historical Aspects of Laos", (in Kingdom of Laos, 1959)

などを中心とする地域の住民は一般にコン・ムアン Kon Muang と呼ばれている。北部タイの地方人というわけである[11]。ところでこのコン・ムアンのなかに北方から部族的なタイ族が南下混入してゆく。タイ・ヤーイ族 Thai Yai ——正しくはタイ・ヤーイ族のなかのニョー族 Njo ——，タイ・ルー族 Thai Lu などがこれにあたり，かれらの社会には北方の故郷，すなわちシャン高原と雲南高原における部族的な伝統がいまだに脈々と流れつづけているようである[12]。かくしてタイ国においても北から南に部族的タイ，地方的タイ，国民的タイがほぼ帯状に配列されていると見ることができる。



第2図　社会発展と民族集団の称呼

(A) タイの場合，(B) ラオスの場合，＊は非タイ系異民族

I. Stage of Tribal Integration（部族・異民族対抗の時代）

II. Stage of Local Integration（タイ族を中心とする地方秩序形成の時代）III. Stage of National Integration（民族国家形成の時代）

2・2　以上のごとき部族，民族の地域的配置をさらに動的に，いはば歴史的展開の様相をしめすものとして見たものが第2図である。ここで第1のステージはインドシナ半島北部および雲貴高原における状況をしめす。ここではタイ諸部族，例えば黒タイ族，赤タイ族，白タイ族，ルー族，タイ・ヤーイ族などが周辺山地の非タイ系民族，例えば苗族 Meo, 搖族 Yao, リス族 Lisu, ロロ族 Lolo, カレン族 Karen, ラフ族 Lahu, ホー族 Hô などと対抗し，あるいは共存しながら地域的な一種の多民族社会を構成していたときである。ここでは周辺諸族にたいするタイ族の政治的・経済的優

11)　普通，北部タイの住民はラオ Lao と呼ばれているけれども筆者はかれら自身がこう呼ぶのを聞いたことがない。他と区別して自らを呼ぶには専らコン・ムアンと称し，またこの名を冠した地方新聞も発刊されている。

12)　シャン高原から北部タイにかけて居住するタイ族を一般にシャン族，タイ・ヤーイ族という。後者はもちろんタイ・ノーイに対する言葉である。筆者の調査した地方ではかれら自身はニョーといっていた。Seidenfaden, E.; The Thai People, 1958. p.30 によるとニョーはかれらの故郷 Ngai Lao に由来する言葉であるという。

位は未だ十分に確立されていない。それどころか，かれらは時としてチベット・ビルマ系民族の支配下に従属していることもあったのである[13]。次に第2のステージはタイ族のうちの若干種族，例えばタイ国のタイ・ヤーイ族，タイ・ルー族，ラオスのタイ・ヌーア族，タイ・プーアン族などが河谷ぞいに南下し，互いに交錯し，一種の混合文化を形成しながら，地方的な社会・経済体制をつくりあげてゆく過程である。タイ族の平野展開にともなって従前の部族的社会体制からの脱却とタイ族を中心として周辺異民族を統合した一種の種族階層的な社会体制が形成される[14]。山麓や平野の要衝に地方町，地方都市を建設し——いわゆるチエン Chieng（町）の建設——，これら交易センターを育成しながら地方の統一をはかり，時には土侯国の成立をみたこともある。北部タイのコン・ムアン社会は以上のごとき経過をへて形成されたものと思われる。部族的統一にかわる地方的統一の時期ということが出来るであろう。次に第3のステージは中央からの強い政治的・経済的影響にさらされて地方的差異が稀薄化し，統一されてゆく過程，地方人にかわって国民が形成されてゆく過程である。「ここはラオスだ」——アメリカではない——といって腰のピストルを構えたラオス軍人がアメリカ人と恋の鞘あてをするし，「われわれラオ人はタイ人を好みません」といって筆者はラオ村落へタイ人通訳をつれてゆくことを断わられたけれども，ラオスにおける国民意識は果してどの程度まで成熟しているであろうか。一方，タイ国においてはチュラロンコーン帝による政治・経済・社会・教育における革新的な企てのもとに大いに近代化が促進され，国民感情，国民意識の高揚をみた。問題はタイ国におけるナショナリズムの勃興ということであるが，ここではバンコックを中心とするタイ人，タイ語，タイ文化が標準的なもの，ひとつの典型として国の隅々に滲透しつつあることを指摘するにとどめておく。

2・3 以下，本稿で問題とするのは部族的タイがいかにして地方的タイのなかにとけ込んでゆくか，タイにおける地方社会・文化がどのように部族と国家の橋わたしをしているかということ，上記1→2のステージの過程を主要な問題にするわけである。もっとも，この場合にも，(1) 部族的タイ→地方的タイなのか，(2) 部族的タイ→国民的タイの結果として，つまり国民的タイの地域的特殊化の過程を通じて地方的タイが形成されるのか問題がのこる。後に考え直すことにしたい。ここでは取あえず多民族の対立・共存の世界から，いかにして，いかなる過程をへて国民社会が形成されるのか，部族から国民国家への過程，＜閉ざされた社会＞から＜開かれた社会＞への通路，それが問題なのである。

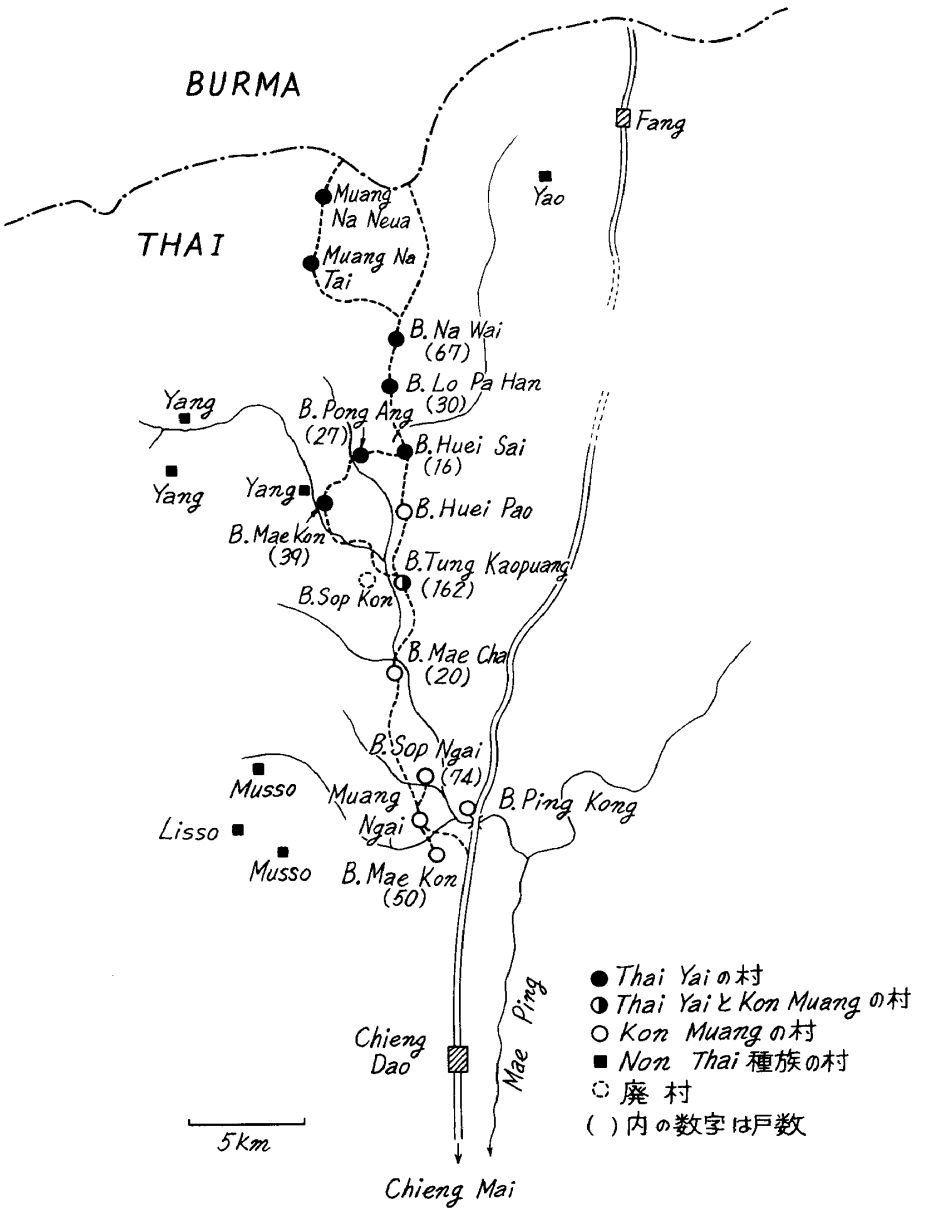
3 部族社会の解体

3・1 北部タイにおけるタイ・ヤーイ族，タイ・ルー族の分布の大勢を眺めることにしょう。

13) たとえば，白鳥芳郎：南詔大理の住民と爨，僰，羅羅，民家族との関係，民族学研究 Vol. 17, No. 3, 4 昭28.

14) 岩田；パ・タン村——北部ラオスにおける村落社会の構造——第1次稲作民族文化総合調査団報告 1964. また，この点だけについては 岩田；北部ラオスの少数民族，史林 の末尾に簡単にふれておいた。

先づタイ・ヤーイ族についてみると，かれらはビルマのシャン高原を故郷として楔状にタイ領に入りこんでいる。例えば後述するチェンマイ北方のムアン・ガイ Muang Ngai 河谷ではその北部にタイ・ヤーイ族が，南部にコン・ムアンがそれぞれ占拠してをり，河谷ぞいにタイ・ヤーイ族南下の形成をうかがうことができる。一方，タイ・ルー族についてみると，雲南を故郷とするかれらの主力はタイ領ではチェンライ附近，ことにチェンカム Chiengkam 周辺からナン Nan 北部にかけて，北部タイの東部をラオス国境ぞいに分布している。大局的には北部にタイ・ルー族，南部にコン・ムアンという形勢である。しかし，例えばチェンライ西南方のウィアン・パ・パオ Wieng Pa Pao 河谷についてみると，タイ・ルー族は河谷上流部を占拠し，下流部すなわち北部にコン・ムアンが分布している[15]。単純にタイ・ルー族とコン・ムアンの住地を北と南に想定するわけにはゆかないのである。両者すなわち部族的タイと地方的タイの境界は単に民族移動史を反映しているわけではなく，集団相互のダイナミックスによって決定されているのである。



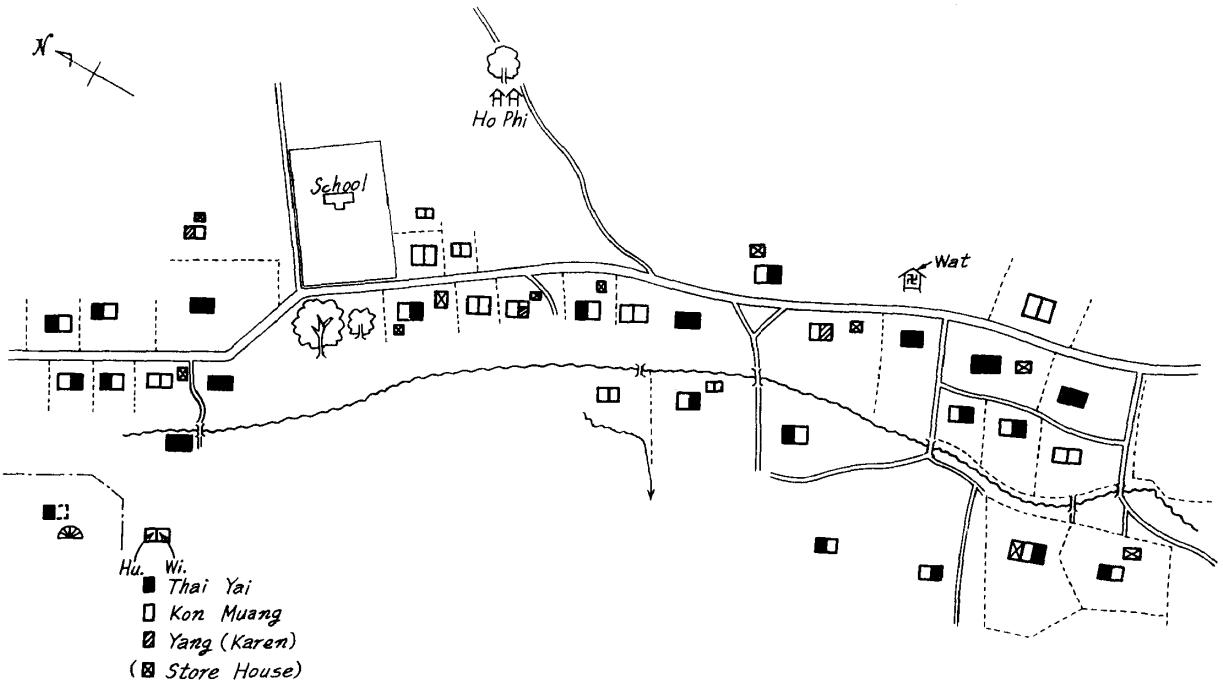
第3図　メーコン河谷におけるタイ・ヤーイ村落の分布

3・2　第3図はメ

15)　ウィアン・パ・パオの町にはタイ・ヤーイ家族1戸のみであるが，更に上流部には B. Mae Chedi, B. Hon 2部落があり，何れもタイ・ヤーイの村だということであった。なお町の1家族は雲南の Sip Song Panna から直接ここに移住してきた由。

ーコン Mae Kon 河谷——ただし，ここにいうメーコン川はメーピン Mae Ping 川上流の1支流——におけるタイ・ヤーイ族とコン・ムアンとの関係をしめす。(1) もちろん大局的には，既述のごとく，河谷の北半にタイ・ヤーイ族村落が分布し，南半にコン・ムアン村落が分布している。両族が北と南に相対峙している形である。この点はムアン・ガイ Muang Ngai 部落の旧村長——現に村第一の金持で，市場を経営し，またトラック改造のバス1台をもち，息子を運転手に仕立てて毎日チェンマイとの間を往復，ときには国境をこえてビルマに入り，交易に従事している，村の最有力者，かつ物知りである——から得た情報の通りである。(2) しかし，現実にそれぞれの村について調査してみると事情は一層複雑である。例えばトゥン・カプアン村 Ban Tung Kapuang (162戸) は昔は全戸タイ・ヤーイ族の村であったが，今日ではタイ・ヤーイ，コン・ムアンが相半ばしている。ホエイ・サイ村 B. Huei Sai (16戸) も，ポン・アン村 B. Pong Ang (27戸) も両族相半ばし，ナ・ワイ村 B. Na Wai では全67戸のうちに5戸のコン・ムアン家族が混入している。つまり，タイ・ヤーイ族が北から南へ一方的に押し入ってきてコン・ムアン社会にくい込んでいるといった単純なものではなく，南に本拠をもつコン・ムアンが河谷ぞいに逆に北方にむかって勢力拡大——少くとも人口移動——を図っているということである[16]。北方のタイ・ヤーイ族と南方のコン・ムアンとは動的に対峙している。(3) この点に関して筆者がやや詳細に調査したメーコン村について考えてみよう。ここで明瞭なことはタイ・ヤーイ族村落，コン・ムアン村落，ないし両者半々の村落といった表現はきわめて大づかみなものであって，実際には村落を構成する1戸1戸，家族を構成する1人1人の帰属が問題だということである。第4図によると，タイ・ヤーイ家族（夫・妻ともタイ・ヤーイ）8戸（内，水車小屋の老人1を含む），夫タイ・ヤーイ，妻コン・ムアンの家族7戸，夫コン・ムアン，妻タイ・ヤーイの家族9戸，夫妻ともコン・ムアンの家族9戸，夫コン・ムアン，妻カレン族の家族2戸(内1戸の妻はコン・ムアンとカレンの混血)，夫カレン族，妻コン・ムアンの家族1，不明1であった。かくしてタイ・ヤーイ族とコン・ムアンとの交錯はきわめて複雑なものであった。問題はそもそもタイ・ヤーイ族とは何者であり，コン・ムアンとは何者であるかということ，部族，種族の認定原理が問われなければならない。この点に関してメーコン村の村人は次のように述べている。すなわち，父がタイ・ヤーイ，母がコン・ムアンの場合に子供はすべてコン・ムアン，父がコン・ムアン，母がタイ・ヤーイの場合には子供はすべてタイ・ヤーイである，と。もちろん，父母ともタイ・ヤーイであれば子供は問題なくタイ・ヤーイである。子供は常にその母と起居をともにするものであり，従ってかれらは必ず母の言葉を話すことになる。そして部族の所属において最も重要なものは言語（方言）であるから，子供は常に母の部族に属することになる。もちろん，タイ・ヤーイ族はかれらの古い伝統文化を

16) この点は Kingshill, K. ; Ku Daeng, 1960. のなかの人口移動に関する章にごく僅かながら事例調査がなされている。p. 21～22.



第4図　メーコン村家族の種族構成

〔註〕　家族ごとに夫妻の種族を示す。なお，左端，水車小舎の家族はもっと上流部にいるが便宜的に記入，この家族は一人ぐらし（妻は死亡）

もってをり，言語以外にもコン・ムアンと相違する面が少くない。女の髪形，髪かざり，服装，入墨の紋様をはじめ，家屋形式，若干の儀礼に関して互に相違がある[17]。しかし，これらの文化的相違も次第に同化，払拭され，最後に言語だけが部族の特質をしめすものとして生き残っている。しかも，これとてもタイ・ヤーイ家族がコン・ムアン社会のなかに移住，混住してしまえばそれまでであって，言語はついに地域原理には勝てないのである。要するに，タイ・ヤーイ族は部族の解体に抵抗しながら，しかも徐々にコン・ムアン社会に吸収されつつある。これが現状である。

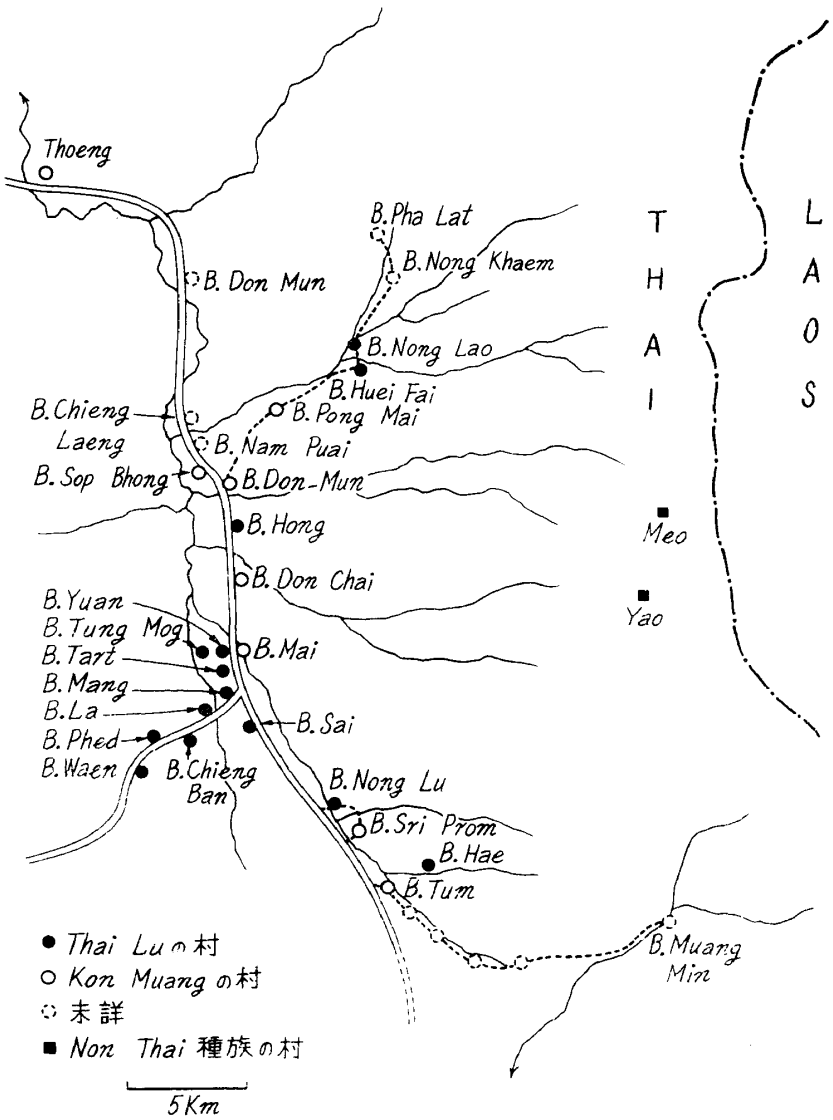
3・3　次にタイ・ルー族の場合について検討しょう。いうまでもなくタイ・ルー族はかってメーコン川の上流，雲南々部にいわゆる12国 Sip Song Panna をつくっていた部族である[18]。12国というのはメーコン右岸の6国，Muang Chieng Hung, Muang Hai, Muang Hun, Muang Chieng Chirng, Muang Chae, Muang Parn と，左岸の6国，Muang Hum, Muang Lar, Muang Yuan, Muang Ou, Muang Pong, Muang Long を併せたもので，かれらはここに Chieng Hung を首都とする部族聯合的な一種の部族国家をつくっていたわけである。ところが，周辺異民族との抗争，ことに回教徒のホー Hô 族との争いに敗れて南下移住を開始し，

17)　牧野・佐藤訳 シャン民族誌 昭19. (Milne, L. ; Shans at Home, 1910)
18)　シップ・ソーン・パンナーは西双版納とかき，今日は雲南省に西双版納自治区ができている。

その一部がタイ，ラオス北部に流入した。筆者の調査地チェンカム Chiengkam 周辺のルー族についていえば，かれらは雲南からビルマに入り，ケントゥン Keng Tung を経由し，メサイ Mae Sai を経てタイ領に入ったものと，雲南からラオスのムオン・シン Muong Sing に入り，さらに南下してホエイ・サイ村 B. Houei Sai 附近からタイ国のナン Nan に入り，改めて北上してチェンカムに至ったものと２経路が認められる。何れにしろルー族の移動は細々とながら現在までつづいて行われている。

さて，チェンカム周辺におけるルー族の分布は一口にいってコン・ムアンとの雑居ということができる。ただし，雑居といってもそのほとんどは村落単位のそれで，家族ごと個人単位の雑居は稀である。しかし，村ごとの雑居であるから，北部にルー族村落，南部にコン・ムアン村落といった村落分布の規則性は全くみられない。ルー族はこのように雑居，混住しながら徐々にコン・ムアン社会にとけ込んでゆく。とけ込まざるを得ない状況に立至っている。しかし，だからといって部族体制がなし崩しに解体してコン・ムアン社会に移行しているわけではない。

最初に部族，種族の相互識別について述べよう。チェンカム周辺にはルー族とコン・ムアンとが分布しているのであるが，かれらに対するルー族側の<呼び名>とコン・ムアン側のそれとの間には若干の相違がある。すなわち，ルー族はコン・ムアンをコン・ムアンと呼ばずにユアン Yuan ないしタイ・ユアン Thai Yuan と呼ぶ。一方，コン・ムアンは自らをコン・



第５図　チェンカム附近におけるルー族の分布

ムアンと称し，ルー族をルーと呼ぶ。中央タイのタイ人に関してはコン・ムアンは特に自らと区別してコン・タイと称するようである。単なる名称，<呼び名>の相違には違いないが，甚しく調査者を惑わすだけでなく，コン・ムアンの位置づけ方の相違として問題を後に残しておく。つまり，タイ族の区分についてルー族はルー；タイ・ユアンと分つが，コン・ムアンはルー；コン・ムアン；コン・タイと区別するということである[19]。

次にルー族における部族認定原理について，かれらは次のように述べている。すなわち，ルー族がコン・ムアン村落に住みつけば——夫あるいは妻として，または家族ごと——ルー族はやがてコン・ムアンと認められる。しかし，コン・ムアンがルー族の村に住みこんで，どれ程の年数を経過しようとも，かれらは依然としてコン・ムアンである。何となればルー族はコン・ムアン方言を完全にマスターし得るが，コン・ムアンは何時までたってもルー語をマスターし得ないからである。部族の帰属はここでもたしかに言語によって決定されるのであるが，その途は一方的にルー族→コン・ムアンの方向に開かれている。一方的な居住地原則がここでは力強く作用しているといわなければならないであろう。

要約すれば部族社会は言語と居住地の共同という原則によって自らの社会統合を維持しながら，徐々にコン・ムアン社会にとけ込んでゆくということである。

〔同様の現象に関してラオスのタイ・ヌーア族社会の事例を述べるべきであるが，別稿の報告を用意しているのでここでは省略する。以下，各項の問題に関しても紙数の都合上原則としてラオスの事例は述べないこととする。〕

3・4 部族社会が地方社会のなかにとけ込んでゆく過程において，社会組織にかんしてはいかなる問題があるであろうか。つまり，部族的な，血縁的に緊密な社会組織は部族の地域展開，その地方社会への移行にさいして邪魔になるのではないか。その場合には当然，社会組織の変化，解体といった現象がみられるのではなかろうか。

(1) タイ・ヤーイ族の社会組織は何よりも先づ双系的な親族関係 bilateral kinship relations の網目によって構成されている。双系的であるから個人は常に必ず父方，母方双方の親族に数えられ，新たに結婚によって成立した新家族は常に夫方，妻方双方の親族にぞくする。このような双系的親族関係をタイ・ヤーイ族はピー・ノーン・カン Phi Nong Kan あるいはヤート・ディオ・カン Yart Diaw Kan, ヤート・カン Yart Kan と称する。ところで，双系であるから親族集団 Kin Group を構成することはなく，親族関係の網目だけがひろく拡大してゆくことになり，社会的行動力ないし村人の動員力はそれだけ弱まらざるを得ない。そこでタイ・ヤーイ族は双系親族に限定をつけ，血縁的・地縁的な遠近にしたがって<近い親族> Yart Phi Nong Klai Klai Kan と<遠い親族> Yart Phi Nong Hang Hang Kan とを区別する。

19) Seidenfaden, E. ; The Thai Peoples, p. 106. によるとメナム上流の4支流流域に住むタイ族を Thai Yuan といっているが，これが本稿における Kon Muang にあたる。

この区別に従って相互扶助，イトコ婚の制限，冠婚葬祭への参加，日常の交際などが行なわれているわけである[20]。

タイ・ヤーイ族はこのような親族組織をもちながらコン・ムアン社会にとけ込んでゆく。しかし，社会の少くともこの面に関する限り，両社会の間に著しい差異はみられない。両社会とも双系的な親族関係をもとに組立てられてをり，同世代間の兄弟関係 Phi Nong Kan, 友人関係が重視されている。村落としての地域集団はあるが，血縁にもとずく社会集団をもたない。結婚が先ず当事者同志の＜語らい＞——これをレー・サーオ Lae Saw という——によって開始され，多く妻処婚 matrilocal residence の形成をとること，オヤの扶養と財産相続において同様の制度をもつことなど互にきわめて類似しているか，あるいは全く同様である。もっとも方言の相違にしたがって制度の呼び名そのものは異っている。しかし，要するに一方の社会から他方の社会への移行にさいして，特に衝害となる点は見出せない。社会組織における親和性が頗る大きいわけでてる。

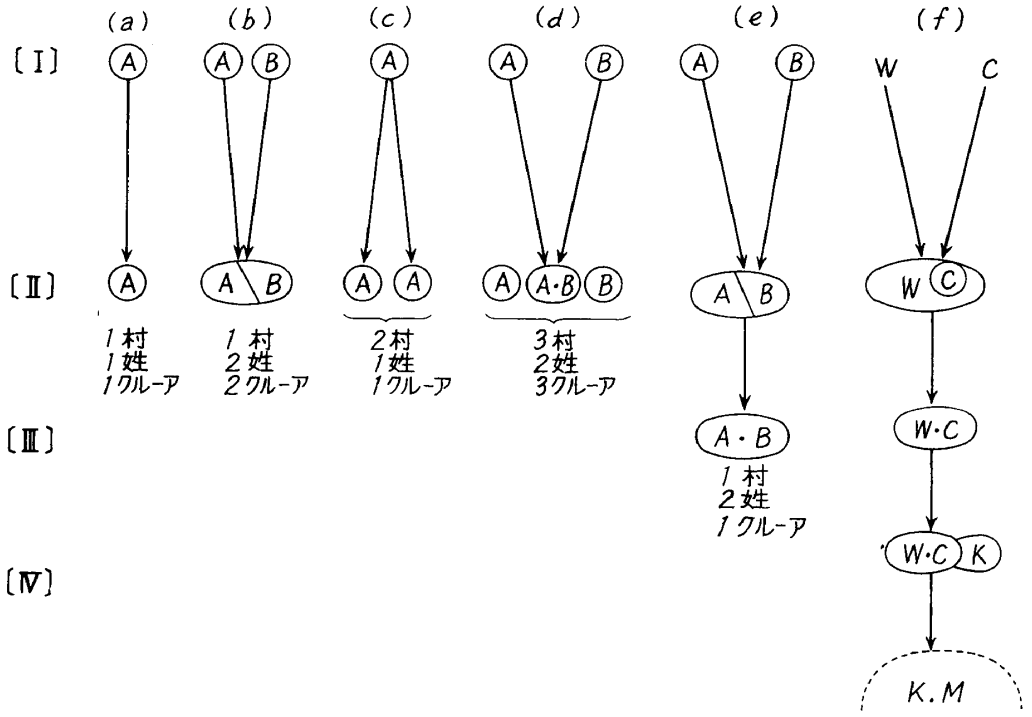
(2) タイ・ルー族における問題点はかれらの社会におけるクルーア・ディオ・カン Kreua Diaw Kan の存在である。これはきわめて強固な血縁的・地縁的集団であって，きびしく，時として戦斗的な——ルー族は周辺異民族，ことにホー族と戦いながら南下してきた——かれらの社会の中核を形成している。クルーア・ディオ・カンとは字義的にいえば，クルーアは＜結び目＞，ディオ・カンは＜1つのもの＞ということ，従ってクルーア・ディオ・カンは一族，一統の意味である。ルー族の言によれば，かれらが雲南で12国 Sip Song Panna を構成していたとき，すでに固有の姓をもっていたという。Wongluang, Prawang, Somrit, Wongyai, Homnern, Chaiklar, Wongyai などの10姓がそれである[21]。かれらは，これらの姓の1つを共有するもの，すなわち同姓集団が同時に1つの村落を形づくっていた。しかも，ルー族の間では同姓間の通婚を好み，従ってイトコ婚，村内婚が頗る多い。クルーア内婚を原則としているのである。また，結婚のさいの居住のルールはきわめて特殊なもので，3年ごとに夫方，妻方の家を往復するという制度—— 3 pi paj 3 pi ma と称する——がとられ，新夫妻の最終的な居住地はその間に夫方，妻方家族の状況によって決定されるという。もちろん，現実には3年ごとの往還が2年に短縮され，あるいは4～5年にのびる場合もあるが，村人すべての認容する制度は上記のものなのである。そして，こうなると遠方婚姻は甚だ不都合であって，夫方，妻方の両家族が同一村内にあることが望ましいし，また実際にその場合が多いのである。このようにしてルー族の村落は地域社会・同姓集団・血縁集団の累積の上に構成されたものであり，

20) タイ諸族における社会組織については別稿に報告したので繰返さない。岩田；インドシナ半島北部におけるタイ諸族の家族と親族，民族学研究 Vol. 29. No. 1. 1964.

21) これらの姓は父系に従って継承される。また，はじめに記した3姓がルー族の古い姓であるという。ここに記した7姓はルー族のうちの大グループの姓，他に小グループの姓として Konmongkol, Puangmali, Chaikeo の3姓がある。

これをクルーア・ディオ・カンと称しているのである。

ところが，この制度はかれらが雲南からタイ国にいたる南下移住にともなって変貌をとげ，また，それに対応する新たな解釈がつけ加えられることになった。第6図にしたがって説明することにしよう。先づ社会組織にあらわれる変化過程をⅠ→Ⅳにしめす。Ⅰはクルーアの原型，すなわち1村1姓1クルーアの時期。Ⅰ→Ⅱはルー族の移動期で，この間に村ごとの，あるいは家族単位の移住が行われ，また，クルーアを異にする村相互の通婚もあったであろう。Ⅱはひとつの安定期でクルーア制度にさまざまの変貌がみられた。ここにしめされたクルーアの諸型が一応，現在のチェンカム周辺村落にみられるわけである。しかし，なかにはこの段階からさらに変化を重ねたと思われる村落もあり，その場合の変化過程をⅡ→Ⅲ→Ⅳにしめした。もちろん，一応のダイアグラムである。次に変化の諸系列について(a)→(f)をしめす。(a)は最も単純な村落ごとの移動でクルーアには何等の変化もない。(b)はA，Bの2クルーアが移動の途次1村に合体したもの，村は1つであるがクルーアは2つの場合である。(c)はAクルーアが2村に分裂し，その結果2村1姓1クルーアとなったもの。(d)は(b)の1変形で異姓の2村間に頻繁な通婚がおこり，その結果として2姓を含む1クルーアが誕生し，結局3村2姓3クルーアを形づくるにいたった。(e)は先づA，Bの合成として1村2姓2クルーアが形成され，次いでこの2クルーア間に頻繁な通婚がおこり，ついに1村2姓1クルーアとなったものである。最後の(f)は筆者の調査したノーン・ルー村 B. Nong Lu について推定したもの。現在の村は2姓——Wongyai と Chaiklar——が1クルーアを形成し，別に20戸程のコン・ムアン集落を附属して



第6図　タイ・ルー族におけるクルーアの変貌

いる。コン・ムアン集落は後来のものであるから1時代前の状況はⅢであったろうし——すなわち2姓1クルーア——，さらに1時代前にはⅡののように Wongyai 村に少数の Chaiklar 姓が混入した形であったろう。そしてその前には Wongyai, Chaiklar 姓がそれぞれ別の1村を形成していたに相違ない。

以上，要するにルー族はその南下移住にともなってかれらの親族組織を変更し，時々の状況に適応させながら弾力的に社会・文化の統合を維持してきた。クルーアという相互扶助，救貧，共同防衛の強力な組織がなかったならば，果してかれらは安定した社会を維持することが出来たであろうか。かれらにとってクルーアは個人と家族のための力づよい後楯であった。

しかし，今やかれらはクルーアを捨て，家族として，あるいは個人として，北部タイの社会，コン・ムアン社会に進出してゆかなければならない。クルーアの強固な社会結合の果す役割は終ったのである。そこでルー族は次のようにいっている。《ルー族がコン・ムアン社会へ入りこむことは出来る。しかし，コン・ムアンがルー族社会に入りこむことは出来ない。村の共同生活，ピー祠の祭礼その他においてコン・ムアンは常に区別されるのだ》と。これはルー族の結合を破ることなく，起り得べき危険を回避しながら，徐々にコン・ムアン社会へ滲透してゆくための少くとも1つの有効な方法に違いない。

3・5 (1) 部族社会としてのタイ・ヤーイ，タイ・ルー社会とコン・ムアン社会との相違のうち，経済の面にあらわれた最も著しい点は市場 Talat の有無である。筆者の調査したタイ・ヤーイ族の村々，タイ・ルー族の村々にはたしかに市場がなかったし，かれら自身あきらかにこの事実を認め，この点に自給自足的なかれらの社会の1特質を見出している[22]。

たしかに，かれらの生活は高度に自然依存のそれであり，余剰生産に乏しい。米倉には家族の1年分の食糧が貯蔵されているけれども，その他には何一つとして貯えがない。季節的に自然の提供する生産物を利用して，しかもほぼ不足のない生活が営まれているのである。日常の暮しにはほとんど金がかからない。村によってタバコ，ガーリックなどの商品作物が栽培されているところもあるが，その量はごく僅かであり，米が商品化しているところは少い。貨幣経済以前といえばいいすぎであるけれども，生活必需品の自給度はきわめて高い。チェンマイ周辺農村では水田も売買の対象となってをり，1毛作田の場合には1ライ当り2000バーツ，2毛作田では3000バーツが相場だといわれ，ムアン・ガイ附近でも1ライあたり2000〜3000バーツの田である。しかし，メーコン村では誰一人田を売るものはなく，従ってその価格は不明である。ここでは田は売買の対象ではないし，宅地を売るものもない。また，家屋の価格を評価することもきわめて困難である。家の建築には釘と若干の金具を買うだけで，他はすべて自家の手製であり，労力は村人の共同労働によっているからである。いうまでもなく経済的な自給自

22) 岩田；東南アジアにおける市場とその商品，人文研究 Vol. 14, No. 10 (昭38)

足体制こそ部族的社会体制を支える１つの支柱であり，もう１つの支柱が外界との交流の欠如，交通事情の悪さである。ノーン・ルー村の場合はさ程でもないが，メーコン村は文字通り山間の僻村で隣村にゆくには森林をぬけて峠を越えるか，メーコン川を縫って徒渉を繰返すか，何れにしても容易なことではない。したがって物資の運搬には人力にたよるか，牛車を利用するしかないが，恐らくその必要は少いであろう。その証拠に，ここでは人夫賃の相場がなく，牛車は村長の家に１台あるきりである。もちろん，雨季ともなれば村外との交通は半ば杜絶するであろう。交通事情がこの通りであるから，商品作物の輸送は一通りのことではなく，当然にかれらの生活は自給自足に傾かざるを得ない。メーコン村に比してはるかに交通条件のよいトゥン・カプアン Tung Kapuang 村における３村人の意見は次のごとくであった。すなわち，この村でつくっている商品作物としてはタバコ，ガーリック，コメ(モチゴメ)があるが，村で１キロ２バーツのガーリックがチェンダオ Chieng Dao では５バーツ，チェンマイでは12バーツ，そしてバンコックでは18バーツになる。コメは同じくこの村では１キロ４バーツ，チェンダオで６バーツ，チェンマイで８バーツである。輸送費と中間業者の介入によってこれだけ物価の差があらわれるわけで，逆に村におけるこのような低価格では商品作物栽培の意欲が殺がれざるを得ないという。そこでこれら北部の村々における物資流通は行商の形をとって細々と営まれてをり，他に山地民族との交易が僅かながらみられる程度である。

ただし，メーコン村においても家畜の売買はおこなわれており，水牛の成牛１頭800バーツ，牛900バーツ，豚300バーツが相場となっている。これには平野村や都市の博労が乾季に村々を廻り歩いて買あつめるのである。

以上，要するに部族的な社会は経済的には自給自足的な社会として特色づけることができる。もちろん，このような村には市場がなく，また，その必要もない。村内のすべての人が互に熟知の間柄にあるわけだから，必要に応じて戸別訪問によって有無相通ずればよいし，物によっては贈答の形をとることもできる。

(2) 市場をもたない部族社会が市場をもつ地方社会のなかに成長，発展してゆく過程を村落規模の拡大として理解することができる。すなわち，部族社会の発展には村落規模において一定の限界があるということ，この限界をこえて成長を続けうるところに地方社会の一特質があるということである。メーコン河谷の村々についてみると，タイ・ヤーイ族の村々のうち Na Wai 村 (67戸)，Lo Pa Han 村 (30戸)，Huei Sai 村 (16戸)，Pong Ang 村 (27戸)，Mae Kon 村 (39戸)，Tung Kapuaug 村 (162戸，ただしコン・ムアンと混住) には市場がなく，コン・ムアンの村々のうち，Huei Pao 村 (80戸)，Mae Cha 村 (20戸)，Sop Ngai 村 (74戸)，Mae Kon 村 (80戸) にも市場がない。従って，この谷筋のうち市場の開設されているのは戸数445戸のムアン・ガイ Muang Ngai だけなのである。

この点に関してチェンカム周辺のタイ・ルー族の村についてみても全く同様であり，純粋の

ルー族村落には市場がなく，コン・ムアン村落にのみそれがみられるのである。個々の村落戸数と市場との関係は省略する。

(3) このようにコン・ムアン村落の規模が200～300戸にも達すると市場が開設される。市場はタイ族固有の商業形態なのである。

もちろん，市場にはごく小規模な，わずか15,6人の女たちが余剰農産物を持よって商う朝市程度のものから，堂々たる建物をそなえた大都市の市場にいたる様々な型がある。ただし，いくら小規模なものでも，東南アジアの市場は雨季にそなえるため大屋根をもった建物が用意されてをり，そのなかに露台をならべて商品を陳列する。いわゆる青空市場というのは見当らない。また，市場の開設時間についてみると，大ていは午前6時～8時ごろが多く，農作業前のひとときを利用しているが，都市では午後の市場 Talat Laeng もあり，1日中開かれている常設市場もある。次に市場の管理および管理人についてであるが，目下のところ資料不足である。ただ，市場開場のころカバンを下げた女管理人が入口に坐り，商品をはこびこむ農民から一定金額――5バーツぐらいか――を徴集し，これを市場経営者つまり町村当局へ上納する制度が知られている程度で，東南アジア以外の他地域で知られているような複雑な制度はないようである[23]。

一方，市場の商人は市場の開かれている村およびその周辺近傍の村々から集まってくる農民であって，もちろん専業商人ではないし，兼業商人ですらなく，あくまで農民である。また，かれらは必ず女性であって，男性が市場の商人となることは都市市場の場合をのぞいて稀である。ということは，市場は農家の日々の余剰農産物・食料品の直接の，すなわち主婦の手から主婦の手にわたる，交易の場だということである。この事実は市場の商品を一覧するだけで明瞭になることと思う。一例としてムアン・ガイ Muang Ngai 市場におけるある朝の商品を列挙してみよう。菜っ葉，ウイキョウ，ナタネの花，刻みタバコ，バナナ，キャベツ，トウガラシ（生物と乾物），豚肉（内臓と足），鳥肉，ナマズ，ガーリック，漬けもの，タロイモ，ビンローの実，揚げバナナ，米粉製の菓子，塩（海塩），オコシ，パクチー，ウドン(ただし2-3cmに切ってある)，豚脂肪の揚げもの，ハルサメ，ナス（紫と白），キンマ，カボチャ，トマト(小粒)，青竹（カオラム用），バナナの若葉，センベイ，カミ茶 miang[24]，シダの葉，サツマイモ（生もの，蒸してココヤシの実の粉末をまぶしたもの），干魚，キンマ用の葉，雨具，傘，ビニールの端切れ，アヒルの卵，小間物，薬であり，翌朝はさらに雞卵，ショーガ，トウモロ

23) 例えば北アフリカの市場に比して東南アジアのそれは，市場制度の未発達；集落の中心部に立地(アフリカのそれには部族の境界市場が少くない)；市場の場は世俗的（アフリカのそれには一種の聖性，中立性がある）；定期市の発達がおくれ；女商人の進出が目ざましいことなど一連の特徴を見出すことができる。

24) カミ茶つまりミェン，ミァンについては興味がある。橋本実；ビルマと四国地方の碁石茶について，茶の起源研究 第1号 (1964)

コシなどが追加されていた。なお，ムアン・ガイ市場は典型的な朝市で朝もやのなかを6時前後に村人たちが集まり，雑踏し，8時ごろになると女たちが三々五々天秤の調子をとりながら家路につくという有様である。

3・6 部族社会の解体とその地方社会への移行は大局的には上述の通りだったとしても，当然のことながら地域的・部族的な差異があり，変化のテンポに相異があることはいうまでもない。タイ・ヤーイ族のメーコン村，タイ・ルー族のノーン・ルー村を比較するだけでも或程度この点を明らかにすることが出来る。

(1) 両村はひとしく自給自足的な，市場をもたない村であるけれども，それぞれの自給度には相違がある。すなわち，メーコン村の方がより自給的な村であり，ノーン・ルー村はやや流通経済に足をふみ入れている。

ノーン・ルー村ではコメ Khao Nung, 玉ネギ Hon Daeng, タバコ Ya Soub, ピーナッツ To Din, などの商品作物を家族ごとにつくり，近村の市場へでかけてバナナ，野菜，ココナット，アヒルの卵，雞卵，ガーリックを売り，そこで塩，ショーユ，布地，ケロシン，カミ茶，皿，芝海老のペーストなどを購入してくる。また，他村の商人が，ノーン・ルー村を訪問して，木綿糸，雞，水牛，牛，豚，コメ，サトウキビなどを購入し，また時には粗糖を買ってゆくこともある。このように，ノーン・ルー村は街道にちかく交通の便のよい村であり，広大な水田と畑をもった比較的恵まれた村でもあるため，自給を基本としながらもなお商品作物栽培への意慾がたかいのである。これらの点に関してメーコン村はいわば隔絶山地村であって，山地民との交易，平野村からの行商人との取引をのぞけば高度に自給的な村である。タバコにしろ雞にしろ，あるいは労働力にしろ，それを売ろうという意志はあるのだが価格をどうつけたらよいかわからない，というのがこの村における実情である。

(2) 部族社会は何等かの血縁集団の存在によって特色づけられるし，原則的には生得的な血縁，性，年令，才能と力倆による差別以外に，後天的な所得，貧富などによる社会的差別はあるべきではない。しかし，部族社会解体の過程にともなって徐々に社会内に各種の差別原理の入りこむこともまた避けられないことであろう。ことに農村社会においては差別は先づ土地所有のうえにあらわれてくる。個人の力倆次第で開田しうるような未開発地域においては，個人的能力，家族的エナジーの相違が先ず水田所有面積の相違としてあらわれるであろうし，頻繁な人口移動がこれを促進することも当然考えられることである。

さて，メーコン村では農民は次の4階層にわけられている。1. ハイ・チャオ Hai Chao（地主），2. タム・エン Tam Eng（自作）3. チャオ・ナー Chao Na（小作）4. ルーク・チャン Lug Chang（農業労働者）であり，それぞれの比率は第1表の通りである[25]。一方，ノーン・

25) メーコン村は，水田 132Rai，宅地各 1～1/4Rai，水牛54頭，牛14頭，豚20頭をもつ。1Rai＝1.6反とすると1家族平均5.4反の水田をもつことになる。なお，モミ収量は反当約3石。

ルー村の農民は 1. タム・コン・ディオ Tam Kon Diaw（自作） 2. イーア・ナー・チャン Yier Na Chang（小作） 3. ルーク・チャン Lug Chang（農業労働者）にわかれてをり，タイ・ヤーイ族のいわゆる地主 Hai Chao が欠けているようであるが，実際には自作地主の形で大地主がいることはいうまでもない。

第1表　メーコン村農民の分類(1962)

農家の分類	戸数	備考
地主 Hai Chao	7	うち3戸は自作地主
地作 Tam Eng	13	
小作 Chao Na	12	
農業働労者 Lug Chang	6	
不明	2	
水車経営	1	
村長の作男	1	
計	42	3戸について2重に計算

問題は農民の階層分化がこれら両村のいずれにおいて進展しているかということであるが，大地主の多いこと，大地主が精米所経営に乗出していること，農業経営が集約的で農産物の商品化が多少ともすすんでいることなどからみてノーン・ルー村の方が一足早く階層分化の途を歩んでいるように思われる。ただし，ルー族固有のクルーア・ディオ・カンと称する親族集団の存在と上記の土地所有にもとずく社会階層の分化とは互にいかに関聯しているのであろうか。また，それをいかに解釈すべきであるか，目下のところ不明というほかはない。もちろん，趨勢としてはクルーアによる村落社会の統合が社会階層のもたらす経済的上下関係による統合にとって代られるであろうことは明瞭であろう。

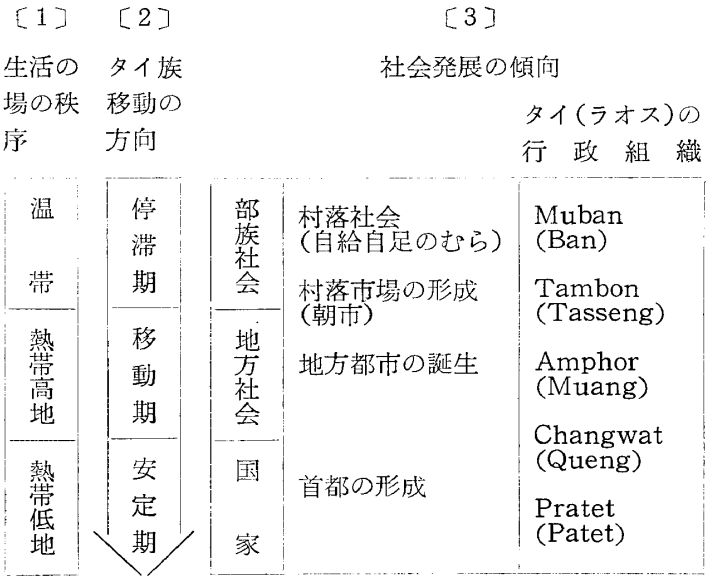
(3)　部族社会における共同体的性格をしめす一指標として共同労働について述べよう。メーコン村ではこれをチョエイ・カン Chuej Kan と呼んでいるが，村の共同労働であるから muban diaw kan chuej kan あるいは tuk muban chuej kan また tuk tuk ban chuej kan とも呼んでいる。田うえ，稲刈り，脱穀をはじめ，結婚，葬式，家の新築，屋根ふきなど家ごとの行事，また灌漑，道路修理，伐木など村公共の行事，およびカウ・ワッサ Khaw Wasa，オク・ワッサ Ok Wasa，新年祭 Phi Mai などの際の行事 Tam Bun には村人が共同して労働に従事し，あるいは供物を寄進する。筆者はたまたまイネ刈り，脱穀のさいの共同作業をみたが，村長カムサイ Kamsai 家の収穫には村人24人（♂19，♂5）がチョエイ・カンしていたし，同じ村人ピンヤー家の収穫には20人（♂10，♀10）が参集して手伝っていた。1戸から2人手伝いに来ている場合もあり，なかには小作人も交っているのであろうが全村39戸の3分の2程度の家々から手伝い人がはせ参じたことになる。共同労働の慣行が今日なおつよく支配していることを知り得るであろう。

一方，ノーン・ルー村における共同労働，クルーア内部での助け合いは村人ないしクルーア成員——原則として両者は一致することが多いが——の当然の義務であって，ことさらに参加

を呼びかけずとも，自発的に協力すべきものとされている。かれらはこれをクルーア・ディオ・カン・チョエイ・カン Kreua Diaw Kan Chuej Kan と呼んでいる。村の少年が見習僧 Nen になるための儀式——，Boat という——，見習僧が僧 Pra になるための儀式——Paek Tu という——，葬式 Tai，家の建築 Paeng Hern，新築祝い Kiun Hern Mai，婚礼 Taengarn などの際にはこの型の相互扶助が期待されるのである。しかし，村人の言によると，道路修理，寺・学校の修築には共同労働への参加を強制されるのであって自由参加ではないという。また，田うえ，稲刈り，脱穀，ヤネ葺きなどは各家族ごとに行い，共同労働はしないということであった。稲作労働のピークをなしている田うえ，稲かり，脱穀作業が共同ではなく個別に行われているということは注目すべきことである。これをどう解釈すべきであろうか。1つの解釈はノーン・ルー村においては全体として共同体的性格がうすれ，ことに農業においては次第に個別経営の傾向が表面化していること，村落生活の儀礼的側面にはなお共同体ないしクルーアとしての強い連帯感がのこっているが，他の面では徐々に家族の独立性がつよまってきたということである。傾向としては正にこの通りなのではなかろうか。

(4) 固有信仰，すなわちピー祠 Hô phi とピー信仰にあらわれた変化過程については別稿に述べたのでここでは省略する[26]。要は村のピー祠から家ごとのピー祠——一般にはプラ・プーム Phra Phum という——への変化である。

以上，2つの社会を対比しながら部族社会からの離脱の様相を検討してきた。当然，そこには地域的，部族的な相違があり，時間的な遅速があった。しかし，それにしても，ともに同じ方向のレールに乗っていることは疑うわけにはゆかない。問題はこのレールが一体なにを指向しているかということである。



第7図　社会発展における3つの尺度
(3つの尺度が図のように対応することを意味せず，若干の異った組合わせが可能である。)

4　社会発展の図式

4・1　東南アジアにおけるタイ族の発展を簡明に要約するとすれば，それは河系にそった進化，支谷から主谷に進出し，さらに大河流域の沖積平野からデルタ地帯におよぶ生活空間の拡大に裏打ちされた社会進化

26) 岩田；ホー・ピー（精霊の祠）について——東南アジアにおける仏教以前の信仰——，民族学ノート所収 1963年

としてとらえることが出来るであろう。タイ族は渓谷移動民であり，かれらの社会は河谷に成立した社会，かれらの文化は河系の文化である[27]。第7図にしたがって説明することにしよう。

(1) メーコン村，ノーン・ルー村で代表される村落レヴェルにおいては，社会は次の諸要素から構成されている。すなわち，一定の土地——水田，焼畑，山林その他——，技術的な諸装備，家族・親族その他の社会，ヒトの伝統的な行動様式すなわち村落文化などであり，これが自給自足的な生活の単位となっている。

(2) 数村から10ヶ村程度の村々を含む地域の中心には最小の市場集落がみられる。メーコン河谷についていえばムアン・ガイがこれにあたり，行政的にはタンボン Tambon (Commune) の中心となっている[28]。この集落は戸数200～400戸程度，寺，学校のほかに市場があり，2～3戸の商店——大ていは雑貨屋，衣料品店などで，華僑の店であることもある——とごく簡単な食堂がある。動力精米機をそなえた小規模な精米所があり，医者のいる村もある。ここから周辺農村へゆくには徒歩か牛車で所によっては刳り舟が用いられ，都市にむかってはトラックないしバスが1日1往復している程度である。ここは農村地域における交易センターであり，北部タイではこうした市場村落が周辺山地民族との最も密接な交易場所となっている。

(3) 郡 Amphur (District) の中心は町と呼ぶにふさわしい。ここには役場，警察署，営林署，保健所などの役所があるほか，街道ぞいに商店が軒をならべ，市場——農産物だけでなく，衣類，日用雑貨の占める比重がたかい——があり，映画館，宿屋のあるところもあり，ガソリンスタンドもある。華僑の経営する食堂が2-3戸，その前の露台で果物やカオラム[29] を売る女たちがいる。チェンダオ郡の中心であるチェンダオ Chieng Dao, チェンカム郡の中心であるバン・ユアン Ban Yuan など何れもこの類の町である。もちろん，これらの町はそれぞれの地方におけるバス交通の中心地であり，常に何台かのバスが屋上に荷物を満載して発着している。

(4) 現在の地方制度の上で郡 Amphur の上位に位置するものはチャンワット Changwat すなわち県 (Province) である。北部タイにはチェンマイ，チェンライ，ランパン，ランプーン，ナンその他の県があり，その中心地に同名の地方都市がある[30]。

1. チェンマイはチェンマイ盆地の中央に位置しメーピン Mae Ping 川にのぞむ古都，方1.5km の城壁をめぐらし，東西南北の4門がある。煉瓦づくりの城壁はさらに外堀によって取巻かれている。都城の南側に市街がのび，これを同じく煉瓦づくりの城壁つまり外郭がとりかこんでいる。一方，都市の東側メーピン左岸には鉄道開通にともなって新市街が発達し，ここ

27) Credner, W. ; Kulturgeographische Beobachtungen in der Gegend von Tali mit besonderer Berücksichtigung des Nan Tsao Problems, Journ. Siam Soc., Bangkok, 1935.

28) ただし，タンボンの長，すなわちカムナン Kamnan は現在はムアンガイにいるのでなく同村南部のメーコン村（筆者の調査村とは別の村）に住む。

29) モチゴメを竹筒に入れてつくった（イロリの上にならべて焙る）携帯食糧，さまざまな味つけがなされている。

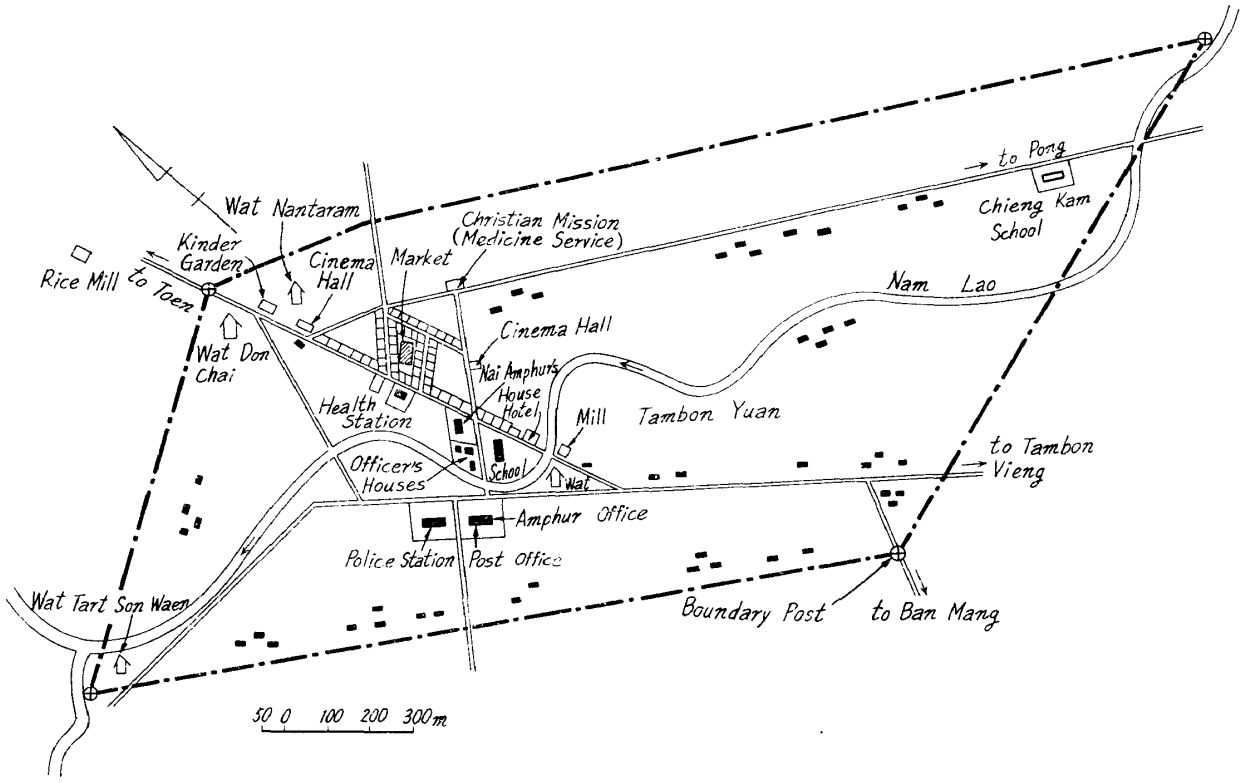
に病院，プリンス・ロイヤル・カレジなどがある。最近は都市西郊の開発が進展し，空港，チェンマイ大学，および近代的住宅地が形成されようとしている。 2. 古都チェンマイの1特質はここがかってのチェンマイ王国の首都であり，1926年まで国王がここに在住していたことである。チェンマイは政治都市であった。同時にここは北部タイにおける宗教的中心地であって，今日もなお頗る多くの寺がここに残っている。図上で数える92寺，しかしそのうち6寺は無住であるから，僧の住む寺は86寺となる。国王の権威は宗教的威光にてらされることによって機能することができたのである。 3. いうまでもなくここは地方的な大交易センターであって周辺諸地方から運搬された各種産物が4つの市場——都城内に1つ，城外に3つ——において取引されている。ここの市場のなかには近郊農民の余剰農産物を取引するところもあるが，大部分はもはや常設店舗によって構成され，華僑はもちろんインド人呉服商が大いに進出している。これら大市場は地方から大量の物資がはこびこまれてあたかも卸売市場のごとき有様であるが，それが直接に消費者の手にわたる点では小売市場でもあるわけであり，特異な存在といわなければならない。このようにチェンマイが大きい市場町であることに加えて，ここは70年前までは北部タイにおける隊商交易の中心地でもあった。当時チェンマイの人口は約10万であったというが，年々700～1,000頭のロバないし小馬が雲南との間を往復し，7,000～8,000頭の小馬，4,000人の運搬人がシャンステートに往来し，1,000頭の象がチェンマイ——チェンセン間の輸送に従事していた。ビルマのモールメンとの間には5,000人のポーターが使役され南方の都市ランパンとの間には3,000頭の牛が使われていた。一方，ラオスのルアンプラバンからは毎年5,000～6,000頭の水牛が運びこまれ，売却されたし，200～300頭の象がビルマへ売却されていった。また，当時メーピン川を利用する舟運が遠くバンコックまで開かれており，旅客と物資を送る川舟が年間約1,000隻にのぼったという[31]。当時における交易都市，遠距離商業基地としてのチェンマイの性格は明らかであると思う。 4. チェンマイがチェンマイ盆地ないしメーピン河系につらなる諸地方を後背地としているように，チェンライはチェンライ盆地の中心，ナンはナン盆地の中心をなす地方都市で，それぞれメーヨム Mae Yom, メーナン Mae Nan 河谷を通じてバンコックと結んでいる。ということは，これら地方都市はそれぞれチャオピーヤ川の支流域を生活圏としてもち，河谷に従ってバンコックと結んでいるのであって，河系相互のヨコの連絡はきわめて稀薄なのである。例えば，メーピン河谷のチェンマイからメーヨム河谷のランパンに至るには一度南下してリー Li に至り，再び北上する以外に方法がない。パヤオ Phayao からナンに至る場合も同様である。 5. ところでこれら地方都市について観察されるもう1つの特色はそれがいはば田園都市であり，周辺農村にたいするサービス提供者として

30) 今日の地方組織はタイでは Muban (village), Tambon (commune), Amphur (district), Changwat (Province) であるが，ラオスでは Ban, Tasseng, Muang, Queng となっている。

31) Seidenfaden, E. ; The Thai People, The Origins and Habitats of the Thai Peoples with A Sketch of their Material and Spiritual Culture, 1958, p. 163.

の機能が目立っていることである。つまり，これら諸都市はそれぞれの特異な地方産業によって養われているものではないということである。例えばチェンライ市街を構成する店舗の種類をみわたすと布地商（インド人経営），金物屋，パーマ屋，理髪店，中華飯店，雑貨店，ミカン卸商，文具店，薬屋，菓子屋，写真屋，自転車屋，自動車部品店，靴・カバン店，銀器店，ホテル，映画館などが数えられるが，そのうち特に目立って多いものは金物・金具屋であり，理髪・パーマ屋である。具体的な店舗数を述べるわけにはゆかないが，ここに自給農村を後背地とする地方都市の１特色がうかがわれるようである。実際，市場で売買される商品のなかには地方的な手工業製品はもちろん，工芸品・民芸品といったものも先づ皆無にちかい。

(5) 河系にしたがって進化，展開する社会のあり方を(1)→(2)→(3)→(4)の系列においてとらえることは決して不当ではなく，少くとも北部タイにおいてはむしろひろく一般に認められる事実だと思う[32]。たしかに村落社会はその構造を複雑化，組織化しながらより高次の，広域支配体制をととのえてゆく。しかし，このことは単に村落の発展としてとらえるべきではなく，村落をふくむ背後の社会・政治体制の変革としてとらえられなければならない。それは決して水の



第８図　地方小都市の１例（チェンカム Chieng Kam 略図）

市場の周囲は商店街になってをり，そこに雑貨店，写真屋，理髪店，パーマ屋，食堂，仕立屋，時計屋，自転車屋，食料品店，化粧品店などの店が軒をつらねている。何れの店も多少ともよろずや式で，その殆んどは華商の店である。なお，Wat Nantharan はビルマ風の寺院建築である。

32) 岩田，東南アジアにおける居住様式の地理学 人文研究 13の11（昭37）および 東南アジアの市場とその商品 人文研究 Vol. 14, No. 10（昭38）においてもそれぞれ若干異った角度からこの問題について考えてみた。

低きにつくような，単なる自然の趨勢ではない。筆者はこの間に２つの社会変革過程をみとめようとする。すなわち，その１は部族社会の解体であり，その２は民族国家の形成，近代社会への動態である[33]。

4・2 そこで必要なことは上述のごとき社会発展の単なる叙述ではなくてその構造分析でなければならない。次のごとき若干の変化過程を想定することができるであろう。

(1) 部族社会の解体→国民社会の形成　部族社会が解体して，それがそのまま国民社会のなかへ組みこまれていったとみる見方。すなわち，部族社会における経済・社会・文化の発展，その内的展開がそのままスムーズに国民的統合に移行したとみるのであるが，国民的統合を成就するための手段に問題がのこるとしても，この過程自体はあり得ないものでもない。現にアフリカにおける新興諸国家はこの途によって国家をつくり得ているのだから[34]。しかし，さしあたって東南アジアにおける過程がこれだとは思われない。(2) 部族社会の解体→地方的統一社会の出現（土侯国，小王国の発生）→国民社会の成立　これは部族社会解体ののちに先ず地方的統一，たとえば土侯国，小王国が形成され，その後にこれら地方的統一体の連合・統合によって国民的統一を成就する途である。部族という政治的な枠が取去られたあとに，地方的な生産力の発展を背景として地方都市，地方権力が成長し，土侯国が誕生する。これが国民的統一のための必要な前提条件になったとする考え方である。たしかに，タイ族，ラオ族における社会発展の型はこれに近いようである。しかし，より正確には，そこでは (3) 部族社会の解体→地方統一社会の未成熟→西欧植民地化（西欧技術文化の滲透）→国民社会の成立　という途を歩んだものと思われる。すなわち，部族社会が解体して地方的統一がはじまろうとするときに西欧列強勢力が侵入を開始し，あるいは少くとも西欧技術文化が地方のすみずみにまで滲透して過去との連鎖を断ち切ってしまった。その後，国によっては完全に植民地化され，あるいは独立国としての体面を維持しながらも強く西欧化の方向にすすみ，この方向にそって国民的統一をかちとっていった。この場合，地方的統一が全く欠けていたとはいえないが，それが未熟のままで外来文化，政治理念が国民統一の酵母として作用したというのである[35]。(4) しかし，たとえ地方社会，地方文化は未熟であろうとも，現実に東南アジア諸国は独立を成就し，地方は国民社会の肢節ないし部分として組み込まれている。そこで今日の図式は，部族社会の解体→地方統一社会の未成熟→西欧植民地化ないし西欧技術文化の透滲→国民社会の成立→地

33) この点を別の見地から考えるとこうなる。(1) 部族から国家にいたる社会発展の尺度と (2) 温帯から熱帯，さらには熱帯山地から熱帯低地にいたる環境の尺度とがタイ族の南下という動きのなかにいかに嚙みあっているかということである。第７図参照。

34) いわゆる近代化の方途としてこの問題を考えることはきわめて重要である。そのために例えば，部族→国家に近いコースを歩んだ東アフリカ諸国と自らの手で都市と国家とをつくり上げていた――のち植民地化されたが――西アフリカ諸国との比較はきわめて示唆的である。現状では政府機関とその役人の能率は比較にならない（西が上）という。

35) 岩田；ムアン Muang の文化，海外事情，1964年10月号所収

方社会・地方文化のあり方が問題視されている，ということである。<地方>は今日2重の意味において問題をはらんでいるというわけである。

4・3 それでは北部タイにおける地方，いわゆるコン・ムアン社会はどのように評価されるであろうか。それは部族の解体をうけとめ，受容するに足るものであり，また，近代化の起点たるにふさわしいものであろうか。

(1) この点を検討するために先づ地方都市の性格について考えてみよう。前項にのべたようにチェンマイ，チェンライなどの地方都市は，同名の盆地の中心地であり，かっての王国の政治的，宗教的中心地であった。そこは周辺農村の交易市場であり，かっては隊商による遠距離商業が営まれたこともあった。しかし，地方伝統産業の発達は必ずしも高度なものではなかった。北部タイにおける地方都市の性格は，従って，次のように要約することができるであろう。1. 都市における産業が未熟であったから，都市住民の職業分化は十分にすすまず[36]，またこれに呼応して都市周辺地域の地域分業も発達しなかった。2. 都市は交易センター，市場町としての機能をつよく持っていたが，その市場は農村における朝市の伝統をひくもので，店舗による商業，商人の誕生は華僑勢力によっておさえられていた。3. したがって都市を媒介とする農→商，農→工の職業の転換，農村社会ないし部族社会からの離脱と都市民の形成は必ずしも十分に行われなかった。ここでの都市住民は，従って都市に住む農民としての性格をのこしている。H. マイナー (H. Miner) が西アフリカ都市の住民について述べた言葉，city-folk は表現上は巧妙ではないが，その意味するところは頗る面白い。都市住民でありながら，部族社会の伝統に従っているということ，そこにはいわゆる市民が不在だということである[37]。非西欧社会としての東南アジア地方都市の性格にもこの点は明らかに看取されるようである。4. 地方都市の成長をゆるすごとき長期の安定した政治権力の発達がみられなかったということも付言してよいであろう。

(2) タイ——ラオスも同様であるが——には地方色 local color がないといわれる。たしかに，旅行の印象としてこのことは事実であろう。車窓から眺める民家，集落などの田園景観に著しい地域差はなく，土産物にしても地方的な特産物はごく少ない。木鉢や木彫りの象などチークを素材とする工芸品は何処へいっても同じものばかり，わずかにコラート，チェンマイの絹織物に特色がみられるくらいである。

しかし，いわゆる地域性に欠けているのかというと必ずしもそうではない。タイでは南・北

36) 筆者の狭い知見の範囲ではランパンには金物細工師の一種のギルドがあるというし，チェンマイ，ナコンラチャシマなどには伝統的な絹織物業がのこっている。

37) Miner, H.; The Primitive City of Timbuctoo, 1953. この点について 岩田；熱帯アフリカにおける交易形態，現代地理講座 6. 昭31年. に解説しておいた。要するに非西欧社会において R. Redfield 流の folk-urban criteria が役立つか否かという問題であり，それに代って新しい都市類型を考えようというわけである。

の相違はかなり顕著であるし，一般的な地域区分としての北部，東北部，中部，南部の4区分もたしかにそれなりに根拠のあるものである。歴史的にみても，例えば当面の問題である北部地域は，1873年まではほぼチェンマイ王国の範図に含まれていたところで，北はファーン Fang 南はピサヌローク Phisanulok にいたる地域がチェンマイを中心とする王国文化によって培われていたわけである。また，東北タイについては古来，問題の多い地域として知られていたが，最近テクスター（R. B. Textor）はバンコックのサムロー（輪タク）引き——その半数以上は東北タイ出身者——について調査し，東北タイのサブ・カルチャー sub-culture とバンコックのそれとの間の不適合ないし隔たり cultural distance について明らかにしている[38]。

また，ここがいわゆる地方色ゆたかな国ではないとしても詳細に検討してみるとそれが全く欠けているのでないことも明らかである。断片的ではあるが例えば女のスゲ笠についてみてもチェンマイ，チェンライ附近，プレー Phrae, ナン Nan 附近，スワンカローク Sawankhalork 以南では互に相違しているし，牛車の荷台の形もまたそれぞれに異っている。稲の脱穀法，民家の棟飾り，女の服装，髪形，荷物運搬法などもまた地域的な微細な相違がある。この微細な相違をさらに列挙することはやめるが，このようにしてイメージされた地域性は一体なにを意味しているのであろうか。このことを明らかにするためには同じタイ族のうちでもなお多分に部族文化の名残りを留めている黒タイ族 Thai Dam, 赤タイ族 Thai Daeng, 白タイ族 Thai Khau, シャン族，ルー族などの文化を眺めるとよい。そこには何と豊富多彩な，ときには過剰なほどの装飾，特異性の強調がみられることであろうか。それが部族レヴェルにおける差異の特徴なのである[39]。そこで問題は次のように答えられる。北部タイの諸地方にみられるいわゆる地域性，ないし地方色は部族起源のそれである，と。今日の地方色は部族起源の多様性の残滓であり，多→1の方向に収斂しつつあるものである。それは地方的な生産力を背景として1→多の方向へ放散，発展しようとするものの萠芽ではない。

実際，地方的政治権力の安定と地方都市の発展のみられなかった地域にユニークな地方色，地方文化が成熟しなかったことはむしろ当然ではなかろうか。

5　地方の意味するもの

5・1　ここで，後進国開発理論のうちのいわゆる社会経済学派の見解について検討してみよう。周知のごとく，この派の代表者の一人ブーケ（J. H. Boeke）は東南アジア社会——彼の場合，主としてインドネシア社会をモデルにしているわけであるが——の特質を2重社会 dual society としてとらえ，海外から持込まれた社会経済体制と原地人による土着の社会経済体制との2面的異質性，同時存在を指摘した[40]。東南アジアには外来の体制，西欧資本主義体制の衝

38)　Textor, R.B. ; From Peasant to Pedicab Driver, A Social Study of Northeastern Thai Farmers Who Periodically Migrated to Bangkok and Became Pedicab Drivers. 1961. pp. 14-15.

39)　岩田；インドシナ半島諸国の服装文化，被服文化 84号，1963. に若干述べておいた。

撃，近代化への刺戟にもかかわらず，あくまでも固有の，伝統体制を維持しようとする村落共同体 desa が存在しているのであって，後者から前者への移行，村落共同体の解体はみられないというのである。ここに東南アジア社会の後進性の本質があり，また経済的停滞性の原因があるという。この理論は華僑とインド商人の位置づけに関してファーニヴァル (J. S. Furnivall) のいわゆる複合社会 plural society 理論と相違し，したがって原住民社会体制と外来社会体制との間のギャップをより深刻に，むしろ両者間に架橋をゆるさない断絶として理解しようとする点に顕著な相違がある。この相違は南アフリカ社会をモデルとして構想されたフランケル (N. H. Frankel) のいわゆる多人種社会 multi-racial society 理論——かれは外来の刺戟，衝撃にたいする原住民社会の反応を開放的，分解的に理解し，原住民社会から資本主義社会への移行を認めている——に比すれば一層著しいものとなる。しかし，当面の問題は体制の移行がどれ程困難であるかということではなく，どこに，原住民社会体制のいかなる面に困難があるかということである。その意味で筆者は東南アジア社会の基本モデルとしてブーケ理論の明快，率直さ，鋭敏な指摘を評価するものである。東南アジア社会は2重社会である。東南アジアの都市は緑一面の水田地帯にうかぶ孤島にしかすぎない。しかし，それならば何が，2重社会における一方から他方への体制の移行を妨げているのであろうか。

5・2 この点に関して，もちろん，ブーケには彼なりの立場があった。しかし，筆者は前節で述べてきたように東南アジアにおける地方社会，地方文化の未成熟，ないし歴史におけるこの段階の欠如——完全に欠けていいるわけではないが——をあげるのである。地方の形成，地方的統一社会の未発達が問題である。しかし，それならば何故に，また，いかなるメカニズムの故に地方的統一が不十分であったかというと，残念ながら筆者の手もとには資料が不足しているし，そのための現地調査も行われていないといわざるを得ない。実際，一口に地方といってもその実態，その在り方は必ずしも単純ではない。

(1) 地方社会を部族社会の延長として，地域的に安定した部族連合体制の一部分として形成することは可能であろう。ある意味では今日のビルマの社会体制にこの面を看取することができる。しかし，部族連合 confederation は部族体制のクライマックスではあっても，その内部には依然として伝統的な部族社会の組織を温存しているわけであって，これが果して地方社会として次に来るべき近代社会への出発点たり得るか否か疑問がないわけではない。(2) 部族社会から地方社会への移行に際しては外部世界からの衝撃が必要であり，しかも，その衝撃は単に経済的なものだけではなく文化的なそれが必要なのではなかろうか。強すぎず弱すぎない適度の文化的衝撃によって，それに対する抵抗と受容の過程を通じて部族社会は地方社会に再編されてゆく。中国文化にたいするヴェトナム社会の反応のうちに，われわれはこの問題にたいする研究課題をもっている。(3) タイ・ラオ族の場合についてみると部族社会から地方社会への移

40) 板垣与一；アジアの民族主義と経済発展——東南アジア近代化の起点——，昭37年.

行が，かれらの南下移動，河谷平野から沖積平野への展開と呼応してみられるようである。そこには伝統社会の内的，自律的発展の過程がみとめられる。しかもなおかれらにおける地方社会の形成は十分なものとはいい難いようである。何故であろうか。もちろん西欧勢力の滲透によって発展の芽がつみ取られたということも考慮しなければならないであろう。(4) 熱帯的自然，ことに熱帯低地の自然が社会発展におよぼす影響については従来ごく表面的にしか取扱われていなかった。もちろん，ここでこの大問題について論ずる余裕はないが，それは社会にたいして統合的に作用するよりもむしろ分解作用として機能するのではなかろうか。強力な中央集権的組織によって統合されるのでなければ，社会は概して大→小の方向に分解してゆく。筆者はクメール王国の末路について考えているのである。熱帯的自然，ことに熱帯低地の自然は村落以上の社会統合にたいして極めて挑戦的 competitive であるように思われる[41]。

何れにしろ，筆者は部族社会と近代社会との間に地方的統一社会——あるいはそれに代る何ものか——が挿入されなければならないと考える。

5・3 一体，地方は近代社会への発展にたいしていかなる意味をもつものであろうか。

(1) 筆者はかってパ・タン村滞在中にしばしば次のような疑問を感じた。＜村人はなぜ水稲2期作をしないのだろう＞＜なぜ水田に肥料を施さないのだろう＞＜なぜもっと働かないのだろう＞。しかし村人の答えはこうであった。＜われわれラオ人は怠けものだからそんなに働きたくないのですよ＞と。この答えはさまざまに解釈することができる。しかし，何れにしろ忘れてならないことは，かれらの告白した＜怠けもの＞の意味はわれわれの社会におけるそれと必ずしも同一でないということである。生活の安定，自然との調和に価値感の基準をおく静的なかれらの社会と，労働・勤労を通じて生産性の向上，生活水準の上昇を指向する動的な社会との相違がそこに見られるであろう。そして前者から後者への転換は単なる精神変革——伝統主義から資本主義的利潤追求の精神へ——だけでは不十分なのであって，それを支持する社会の仕組みが変革されなければならない。部族社会の解体，その内部における個人と個人，家族と家族との競争が必要であり，＜働く＞ための，あるいは＜働かざるを得ない＞精神的・物質的な場が社会のなかに組みこまれなくてはならない。

(2) もちろん部族と部族との競争もあり得る。しかし，部族レヴェルでの競争は主として軍事力の争い，縄張り争いに終始しやすい。小なりといえども都市・農村を軸とする地域分業，それを支える社会分業の滲透，ヒトの多面的な才能開発，多様な価値感の創造は必ず＜地方＞を舞台にすることによって可能となる。それはまた古代帝国におけるごとき奴隷労働の採用，カースト制度を含む明瞭な社会的差別の存在を前提とするごとき社会においては十分に発達し

---

41) この点に関して筆者は別稿にも報告したが，1つの社会構成原理としての父系制社会の意味，および基本的には双系制社会を特色とする東南アジア社会の位置づけに関して，岩田；インドシナ北部におけるタイ諸族の家族と親族，民族学研究 Vol. 29. No. 1, 1964 に述べておいた。

にくいのではなかろうか。

(3) 分業体制の進展，分担と協力の組織，リーダーシップとフォロワーシップの樹立など，要するに社会組織の機能化と政治組織の高度化とは，単に生産力の発展に裏づけられた結果ではなく，それを支える自然利用体系の高度化と対応するものである。そしてこのような機構が作動しうるところ，あるいは作動するための実験の場は地方社会をおいて他にないのではあるまいか。

(4) 部族的な社会における生活技術の習練は伝統的な方法によって行われてをり，特殊な教育制度はそこでは不必要である。教育——学校教育——が必要であるのは子供たちがそこで生活しなければならない未知の，変異に富んだ——かれらの故郷とはちがった——環境に適応するためである。換言すれば教育が効果的であるためには教育されたヒトの活動舞台が予め用意されていなければならないだろう。それが地方社会なのである。

6 要約と展望

タイ族における社会進化に関して筆者は一応次のように考えている。

(1) 社会構成における部族制と国家制とは峻別しなければならない[42]。タイ諸族がインドシナ半島北部の山岳地帯に割拠していたころの社会構成は概して部族制のそれであった。のち，かれらが南方の平野部に展開するに及んで部族制から国家制にすすみ今日に及んだ。この点は種族，民族の称呼からも跡づけることができる。(2) 部族制から国家制への移行は平坦な，飛躍のない道ではない。狩猟・採集民はもちろん牧民のほとんどはこの過渡を乗り切っていない。この道はすべての民族，あらゆる生活様式にたいして開かれているのではなく，主として農耕民に開かれている。しかも，すべての農耕民にたいしてではなく，自らのうちに都市社会を育成し得た民族にのみ開かれている。都市——地方都市を含めて——および都市の存立を可能ならしめた地方社会が同時に部族制から国家制への跳躍台となった[43]。(3) タイ諸族はたしかに部族制から国家制にすすみ，現にタイ，ラオスという民族国家を形成している。しかも，なおこれら両国において——ことにラオスにおいて甚しいが——前近代性ないし後進的諸側面の払拭が問題であるとするならば，問題のよって来るところ，病根は地方都市，地方社会・文化の未熟にあるかと思われる。部族制からの離脱はほぼスムーズに進んだけれども，解体した部族社会がそこに再編成されてゆくべき地方社会，およびその核としての地方都市の発育が十分ではなかったということである。(4) たしかに，西欧列強勢力の滲透・植民地化と華僑社会の被覆が負の作用を及ぼしたことは疑うべくもないであろう。しかし，原因はそれだけではない。この点に未来の熱帯社会，熱帯文明の可能性にかかわる問題がひそんでいるのである。

小論は主として社会の内的展開過程について考えたため，熱帯ことに熱帯低地における人類生活の条件について述べ得なかった。別稿を予定している。

---

42) Goldschmidt, W.; Understanding Human Society, 1959, p. 183 など参照。
43) 都市を欠いた国家（？）を社会発展史のうえにどう位置づけるかが問題である。